

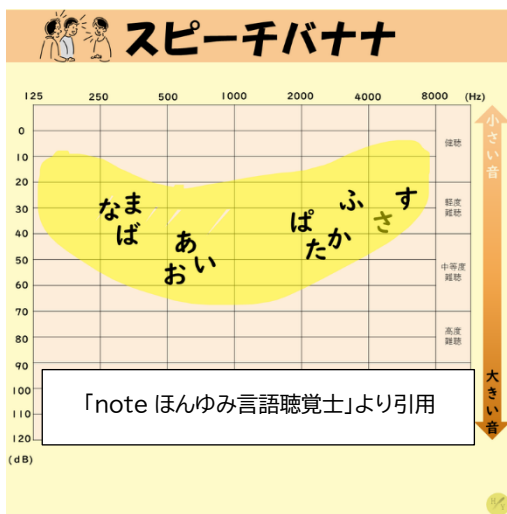
きこえ・ことば

2022年10月
小学部自立活動担当

保護者のみなさま、いつも発音の宿題をチェックしたり、お子さんと取り組んだりしていただき、ありがとうございます。今回は、発音の授業で行っていることや、ご家庭でも取り組んでいただきたいことについてご報告いたします。

相手の口元や表情や音韻サインを見ながら『聴く』

このグラフは、下記のブログから引用したグラフです。縦軸は音の大きさ、横軸は音の高さを表しています。黄色い部分は「スピーチバナナ」と言われている部分で、話し言葉に使われる音の高さや大きさを表しています。詳しく見ていくと、母音あ、い、おは、

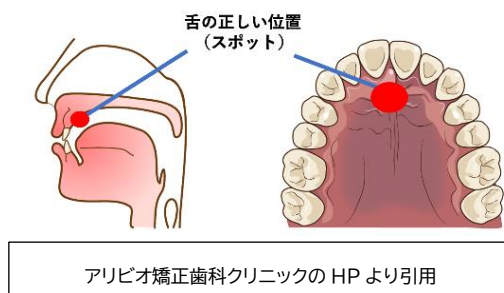


ヘルツ デシベル
500Hz付近にあり、他の子音と比べると、40dB以上のやや大きめの音なので、聴き取りやすい音であることが分かります。

さて、9月の下旬から、高学年の発音指導（個別指導）の際に、言葉の聴き取り学習を行っています。

担当者の口元を隠して発音した1音1音の聴き取りをさせると、母音はほとんどの子どもが正しく聴き取っています。一方、子音は、「た→か」、「す→ふ」のように聴き取っている子どもが多いことが分かりました。「た」は/ta/と表し、「か」は/ka/と表しますが、/t/と/k/はほんの一瞬の発音であり、先ほどのスピーチバナナを見れば分かるように、高音域で小さめの音なので、聴き取りが難しくなると考えられます。さらに口元を隠して聴き取ることは、口形や舌の動きなどの視覚的手がかりがない状態で聴き取ることになるので、大変難しい課題ということになります。しかし、「た」と「か」は、どちらも「あ段の音」であり、「す」と「ふ」は、どちらも「う段の音」であるので、母音の成分は正しく聴き取ることができているということが言えます。ある子どもが「一生懸命聞いたけど、口が見えないから難しかった」という感想を宿題プリントに書いてきました。この経験から、話を聴くときには、相手の口元や表情、音韻サインを見ながら聴くことが必要であるということに気づいたようです。今後も、話を聴くときには、視覚的な情報を最大限活用しながら聴くことが大切であるということ、子どもたちと確認しながら授業を進めていきたいと考えています。

舌のトレーニングを開始しました



これまで、口の体操や食の口トレやホットケーキの舌づくりなどを通して、舌の筋トレを進めてきました。

先日、「日本人のための声がよく『舌力』のつくり方」(篠原さなえ著)という本に出会い、さらに舌の筋トレの必要性を実感したので、お伝えします。

みなさんは、ふだん口を閉じているときの正しい舌の位置を意識したことはありますか。正しい舌の位置は、上の前歯の裏の少し膨らんでいるところ(スポット)だと言われています。しかし、子どもたちに尋ねると、下の前歯の裏に舌先がついていると答える子どもが多くいます。下の前歯の裏に舌をつけている状態は、「低位舌」と呼ばれ、口がぼかんと開きやすくなるため、口呼吸になることが多いそうです。さらに歯並びにも影響を及ぼすことがあるとのことでした。低位舌のままでは、発音が不明瞭になるだけでなく、健康にも影響があるということが分かったので、舌の筋肉を鍛え、正しい発音のための舌づくりを進めていきたいと考えています。ご家庭でもぜひ話題にしていきたいと思います。

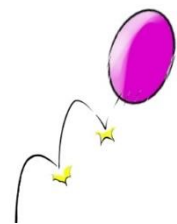
<舌のトレーニングの方法>

- ① ホットケーキのような平らな舌を作る。(全身の力を抜くようにすると作りやすいです。)
- ② ①の舌先を上の前歯の裏(スポット)にぴったりとつける。
- ③ 口を閉じる ②のときに、ホットケーキのような平らな舌のまま、スポットにつけるようにすることがポイントです。

語感を発音学習に生かす① パ行音とバ行音 軽いイメージがするのはどっちの音？

子どもたちの発音を聞いていると、パ行音は簡単に出せるようですが、バ行音がパ行音に近い音になっていることがときどきみられます。そこで、パ行音とバ行音の発音要領を次のように言葉で指導しました。

「パ行音は、急に唇を開く。バ行音は唇の力を抜いて優しく開く。口の中に息をためてから声を出す。」しかし、言葉だけではイメージを作りにくい子どもがいました。そこで、「ことばのトリセツ」(黒川伊保子著)からヒントを得て、語感を発音学習に生かす取り組みを始めました。



『ポンポン』と『ボンボン』では、どっちが軽いボールだと思う？」と尋ねると、「『ポンポン』の方が軽い感じがする。スーパーボールを想像する。『ボンボン』は、ボウリングのボールのように重い感じがする。」と答える子どもが多かったです。このように、パ行音とバ行音の発音要領に、ボールの重さのイメージを付け加えることにより、「確かに発音しやすくなった」と答える子どもが出てきました。これからも、語感を生かした発音学習を実践していきたいと考えています。

